



2023 年 7 月号 (No.15)
 公益社団法人 日本山岳会
 The Japanese Alpine Club
 東京都千代田区四番町 5-4
<https://www.jac1.or.jp>

3 カ月に一度発行する「山」YOUTH 版では、YOUTH CLUB 世代の会員のご活躍、東京や各支部の YOUTH CLUB の取組みなどをご紹介していきます。話題のご提供や感想など、ご意見何でもお待ちしております！

【編集担当】
 松原尚之
 滝沢守生
 谷山宏典
 田島圭悟
 新井 梓

東海支部・広島支部交流会、開催される

6 月 17 日と 18 日の 2 日間、広島県の三倉岳にて広島支部と東海支部の交流会が開催された。東海支部の高橋玲司支部長に東海支部で始動した「アルパインクラブ」への想いとともに、交流会の様子を報告してもらった。

広島支部は、クライミングを基軸に若者が集まり活性化している。そんな話を年次晚餐会で聞き、無性に行ってみたくなった。広島、東海などの各支部と本部のユース会員は 2022 年 5 月に御在所で、11 月には広島で交流会をしたが、私は不参加。どうしても広島に行き、見てみたい。2 月に偶然八ヶ岳で広島支部の大田由孝さんと出会い、提案した。快諾をいただき、早速東海支部に持ち帰ったが、ここからが大変。「ロープクライミング」を青年部や学生に提案したところ、「最近やっている人がいない」などとまったく人が集まらなかったのだ。

■アルパインクラブという選択肢

設立 60 年を超える東海支部は、マカルー、K2、ローツェ南壁など、ヒマラヤに数々の足跡を残し、精鋭的なクライマーを輩出する土台となってきた。現在会員数は 350 名を誇り、全国の支部の中でトップであるが、ロープクライミングを行う会員は激減して数人しかいない状況に。このことは、当支部の「創始の志」を失うばかりではなく、危機感を覚えた。

東海支部のユースクラブ・青年部・東海学生山

岳連盟は年齢制限がある。私たち 50 代から見ればじっくりこない。そこで年齢制限のないアルパインクライミングを志す集団を作るという選択肢を見出した。

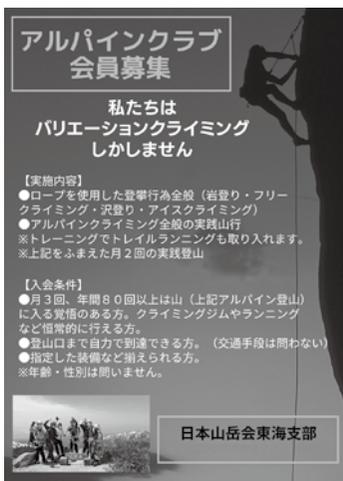
蓋を開けてみると、あっという間にアルパインクラブに 20 名を超える人が集まって設立にこぎつけ、何とか広島へ向かう 5 名も集まった。学生から支部長まで年齢幅も大きい。

■三倉岳にて広島支部と交流

前夜に岐阜と愛知から合戦の地・関ヶ原に集合し、出陣。広島との高度なレベル差、おもてなしにおののきながら車を走らせた。「負け戦ですね」との一言で皆苦笑い、そんな三倉入りであった。

17 日、易しいと言われるルートに案内されるが、クラックとナチュプロのルートに難儀。三倉の難しさに直面した。三倉岳はスケールも大きく、景色も最高。大田さんや大野雅樹君の案内で最高のクライミングをさせていただいた。

管理棟まで下山すると、東海支部・広島支部おもてなしの横断幕。森戸隆男広島支部長もお見えになり、盛大なバーベキューのあと、広島支部アマダブ



アルパインクラブの募集チラシ



東海支部、広島支部のメンバーが集合！

ラム遠征報告、当支部の草野駿希君の北ア全山単独無補給縦走の話などで交流を行った。夜遅くまで盛り上がり、翌日も簡単だと言われながら登れないクラックルートに悲鳴を上げつつ登った。

今回広島支部のパワーに感動した。構成メンバーが若いだけではなく、クライミングもうまく、安全にも配慮している。今後、クライミングを介した交流は活性化の起爆剤になることは間違いない。「アルパインクラブという選択肢」は間違っていなかつ

たと感じた。(東海支部長 高橋玲司)

【「御在所フェスティバル」のお知らせ】

さて、今後である。この灯を消さないためにも考えた。全国ユース交流会として、9月23日～24日御在所藤内壁にて「御在所フェスティバル」を催します。東海学生山岳連盟による全国の大学生の交流も行います。クライミングするしないにかかわらず、全国の支部員の皆さん、ぜひいらしてください。

連絡先 jactokai105@gmail.com (東海支部)

再びの未踏峰 (前編)

ジャルキャ・ヒマール登山隊が帰国した。初登頂は果たせなかったが、それぞれの隊員にとって忘れがたい登山になったのではないだろうか。2度目の挑戦となった関西支部・竹中雅幸さんによる手記の前編をお送りする。

毎日聞くコロナという3文字にもすっかり慣れ、生業であるガイド山行は規模を縮小して日帰りを中心とし、育児と仕事、合間を縫ってプライベートの山に出かけるという生活ルーティンができあがりつつあった2022年初夏。きっかけは1本の電話だった。ボルダリングジムで登っている最中、本会の120周年記念事業にもなっているヒマラヤキャンプを通じて知り合った齊藤大乘さんからの着信に気づいた。大乘さんは2022年春、ネパール・マナスル山域の未踏峰パンカール・ヒマールの初登頂に成功していた。その際、2020年に竹中が目指したジャルキャ・ヒマールが国境稜線にある関係で、数年以内に登山許可が下りなくなる可能性がある、という情報を得たという。そこで来年、許可が出るうちにジャルキャ・ヒマールへ行かないか、という内容であった。

正直なところ、再びこの山を登ることになるとは思っていなかった。3年前、自らが隊長となり、仲

間を集めて未踏峰ジャルキャ・ヒマールを目指した。メンバーの都合から通常のプレモンスーンシーズンよりやや早い3月1日の出発となった。前年末より新型コロナウイルス感染症の話題は出始めており、2月には遠征を執行するか、延期するかをメンバー間で協議し、予定通りの実施を決めていた。ネパール政府は3月3日には日本を含む5カ国のアライバルビザ発給停止を発表したが、すでに私たちはカトマンズに到着したあとであった。3月13日には2020年春シーズンのすべての登山許可証発行停止が発表されたが、私たちは情報の届かない山中におり、その後の混乱を想像する余裕もなく、慣れないヒマラヤの高度と降り積もる雪に対峙していた。

結局このときは核心部のアイスフォール帯手前の5,400m地点を最高高度として撤退し、ベースキャンプから下山後、ネパール全土でロックダウンが行われていることを知った。最終的にチャーター便で帰国し、奈良の自宅に戻るまで3カ月もの時間がかかってしまった(詳細は「山」2020年8月号参照)。

帰国後も続くコロナ禍や第一子の誕生によって海外は遠いものとなっていた。それでも糸口になるものを求めて、ヒマラヤキャンプへ参加したり、支部間の交流会を企画したりといったことを細々と行っていた。「今行かないでいつ行く?」電話を切ったあと、そんなことを考え始めている自分に気が付いた。(次号に続く) (関西支部 竹中雅幸)



ジャルキャ・ヒマール隊のメンバー(右から2番目が竹中)

“クライミングレジェンド”池田功インタビュー（前編）

80年代前半のフリークライミング界において数々の初登記録を打ち立ててきた池田功さんは、2017年に日本山岳会に入会しており、一部会員の間で「なぜアノ池田さんが!？」と話題になっていた。ユースクラブ担当理事となった池田さんのことを若い会員にも知ってもらいたく、入会の動機や昔のクライミングのことなど、いろいろ聞いてきました。

—JACの会合で初めてお会いしたとき、「なぜ池田さんがここに!？」と驚いたのを今でもよく覚えています。フリークライミングの歴史において、池田さんは“伝説的存在”[※]ですから。そもそも、どのようなきっかけでJACに入会したのですか？

池田 きっかけは、若いころからお世話になっている社会人山岳会の方に声をかけてもらったことです。「なぜJACに？」という質問に対しては、今の僕は20代のころの僕ではない、というのが答えになります。若いころはとんがっていたかもしれませんが、年月を経ることで自分が社会の中でどのように生きていくかを考えるものなんです。30人、40人ぐらいの小規模な山岳会であれば、「いまさら入ることもないだろう」と思ったでしょう。でも、日本山岳会ほどの大きな組織に身を置くことで、僕が何かの役に立つことがあるかもしれない、自分にとって新たな世界が開けるかもしれない、という気持ちで入ったんです。

—ユースクラブでも池田さんのことを知らないメンバーは多いと思います。聞きたいことは山ほどありますが、そのひとつが1982年の谷川岳—ノ倉沢衝立岩正面壁のフリー化でしょうか。

池田 当時の僕は20代前半で、就職せずに、クラ

イミングで生活ができないかと模索していました。それで「クオーク」というクライミングスクールを開いたり、2社の企業にスポンサーになってもらったりしていたのですが、クライマーとして食っていくには何よりもフリークライミングの価値を社会に認知してもらう必要があると考えたんです。

—それで衝立岩をフリーで登ろうと？

池田 そうです。衝立岩はかつて戦後最大の課題とも言われていた大岩壁で、人工ルートとして名前が通っていたじゃないですか。そこをフリーで登れば、相当なインパクトがあると思ったんです。トライする前には『岩と雪』の編集部を訪ねて、「掲載するなら巻頭のカラーグラビアで扱ってほしい」「そうじゃなければ『Number』など、ほかのメジャー誌で発表するから」と生意気なこと言って、記事化の約束を取り付けたりもしました。

—同じ年には奥多摩の御岳渓谷でボルダーの開拓も始めていますよね。「忍者返し」「デッドエンド」などが有名です。当時、ボルダリングという概念は、一部のエリアで試みられていた程度で、まだまだ一般的ではありませんでした。なぜ御岳のボルダーを開拓しようとした？

池田 フリークライミングを社会に広く認知させて流行らせるには、東京近郊の手軽なところにフィールドがあった方がいいと考えたんです。御岳渓谷はカヌーやフィッシングなどのアウトドアスポーツを楽しむために多くの人が遊びに来る場所でした。その河原でボルダーをやっている人がいたらいいんじゃないかって、そう思ったんです。

—衝立岩のフリー化が既存の登山界やクライミング界への強烈なメッセージだとしたら、御岳ボルダーの開拓は社会一般へのアピールだった、と考えていいのでしょうか。

池田 まさにその通りです。

—当時、そんな発想でクライミングをしていた人は、ほかにいました？

※ 1980年代初頭、フリークライマーとして頭角を現し、当時の国内最難ルートの数々（以下参照）を初登。活躍した期間はわずか4、5年に過ぎないが、その記録はクライミング史に鮮烈に刻まれている。

【主な初登ルート】

1981年 クレイジージャム (5.10d) / 小川山
同 スーパークラック (5.11a/b) / 甲斐駒ヶ岳赤石沢Aフランケ
1982年 グリズリー (5.11d) / 谷川岳—ノ倉沢衝立岩正面壁フリー化
1983年 ジェット (5.12a) / 鷲頭山
1984年 スーパーイムジン (5.12c) / 小川山
1985年 スクラップ (5.12d) / 城ヶ崎

池田 いなかったですね。フリークライミングで食おうなんて考える人はまったくいない時代でしたから。自分は、日本のフリークライミングの世界で初めてのプロクライマーだったと自負しています。就職せずにその道に踏み込んでしまったので、やるしかなかったという面もありますけど。(次号に続く)

* * * * *

「登りたいから登る」という本能はクライマーに

とって何よりも大事だが、池田さんはプロとして「フリークライミングの価値を世の中に認めさせたい」という動機も強かったことがお話から伝わってきた。80年代前半に開拓した数々の素晴らしいルートはもちろんだが、そうした視点も時代を切り拓く先駆的なものだったのではないだろうか。インタビューの後編では、池田さんの現在とこれからについてお聞きした。次回を乞うご期待！

(聞き手:松原尚之、谷山宏典)

ユースクラブ活動レポート

「カナディアン・ロッキー ユース合宿 2023～2025」始動

6月下旬、ユース世代の会員たちがカナディアン・ロッキー合宿に出発し、7月上旬に帰国した。現地から届いた写真とともに計画の概要を紹介する。

カナディアン・ロッキーは雄大な大自然と風光明媚な景色で知られる、世界有数の山岳エリアのひとつです。氷河を擁する3,000m級の山々、上質なバリエーションルートの数々は、日本では出会うことのできないものばかりです。しかも、1カ月近い日程を要するヒマラヤ登山とは異なり、カナディアン・ロッキーは10日間程度で行くことが可能で社会人にも行きやすいというメリットもあります。

そんな夏のカナディアン・ロッキーで、日本山岳会の全国のユース世代のメンバーを募り、登山やクライミングを実践する「カナディアン・ロッキー合宿」を3カ年にわたって計画することにしました。

第1回合宿は本年6月23日から7月5日にかけて、以下のメンバーで実施しました。詳細は、次号の「山」ユース版でまたご報告します。

【日程】

2023年6月23日～7月5日

【参加メンバー】

CL 松原尚之 (58・ユースクラブ委員会委員長)、SL 山田利行 (38・東海支部、カナダクライミングガイド)、大田由孝 (49・広島支部)、井上紀江 (51・広島支部)、大野雅樹 (25・広島支部)、草野駿希 (24・東海支部)、涌嶋満 (42・ユースクラブ)

【クライミングエリア】

マザーズデイ・バットレス (8ピッチ)、EEOR (イースト・エンド・オブ・ランドル、3ピッチ目まで)、トンネルマウンテン (6ピッチ)、タカカウ・フォール (11ピッチ)、レイク・ルイズの岩場、グラッシー・レイクの岩場、ハートクリークの岩場、Mt.アサバスカ (3,491m、氷河登山) (松原尚之)



バンフ郊外のマザーズデイ・バットレス (真ん中の岩峰)



マザーズデイ・バットレス頂上にて